

## 静岡県知事に面会して要望書を提出 !!

事務局



県知事に要望書を提出する理事長と事務局長



知事室で記念撮影

2005年6月22日、静岡県知事石川嘉延氏との面会がかない、県知事室で知事に直接「静岡県立自然史博物館設立に関する要望書」を手渡すことができました。知事との面会予定時間は15分間でしたが、20分以上時間をいただき、NPO自然博ネットや出席理事の紹介、要望書の主旨などについて説明を行い、知事のお考えをお聞きし、若干の意見交換を行いました。

要望書の全文については、本号の3~6ページに掲載しましたが、その概要については以下のとおりです。これらの点について、いくつかの事例も交え知事には説明しました。

### 1. 県立自然史博物館の早期建設

全国で唯一、県立博物館のない静岡県に、この豊かな自然を生かし、県民への教育普及、そして未来につなげるために「静岡県立自然史博物館」の建設をお願いする。大きな箱物でなくても、調査研究、資料保存、常設展示室、特別展示室を有し、静岡県全体をまるごと自然博物館として利用できる基幹の機関と施設であって欲しいと考える。

### 2. 開設準備室の早期立ち上げ

博物館の企画と建設には長い年月を必要である。学芸員や専門スタッフを配置し、県立博物館像を明確にしていくためにも、一刻も早く「自然史博物館設立準備室」または「仮称自然史研究センター」を立ち上げ、建設に向けて推進してもらいたい。

### 3. 自然学習資料保存事業の継続

現在、実施している自然学習資料保存事業を継続し、散逸する恐れのある自然史資料の登

録、保存を積極的に推進してもらいたい。私たちNPOも協働していきたいと考えている。

### 4. 資料保管庫の確保

自然資料は、数十万点に及ぶことも考えられ、現在の事業場所はすぐに手狭になることが予想される。また、現状の施設では十分な防虫燻蒸はできず、資料の保存に適する資料保管庫を確保する必要がある。

これらの要望に対して、知事はこれまでの推進協議会やNPO自然博ネットワークの活動を理解され、箱物としての博物館よりも静岡県としての特徴をもった、むしろ研究機関のようなものと考えているということをお知らせし、「NPO自然博ネットのみなさんの考えと隔たりがないことに安心した」と言われました。また、提出された「自然史博物館設立に関する要望書」を今後、検討することも約束されました。

# 静岡県立自然史博物館設立に関する要望書

静岡県自然史博物館ネットワークでは、平成 17 年 6 月 22 日に石川嘉延静岡県知事に面会して、「静岡県立自然史博物館設立に関する要望書」を提出し概要説明と懇談を行いました。この要望書の全文（付録：静岡県の長期計画での位置付けとこれまでの検討経緯は省略）を掲載します。

静岡県では、平成元年度より県立博物館整備に向けた検討が実施され、平成 6 年度に自然系博物館整備の方向性が示され、翌平成 7 年度に策定された静岡新世紀創造計画において自然系博物館整備が主要施策として位置付けられました。その後、平成 13-14 年度に自然学習・研究機能検討会が行なわれ、自然系博物館に対する県民ニーズや自然学習・研究機能等が検討され、平成 15 年度から散逸の危惧がある自然学習・研究資料保存事業が始まりました。しかし、県の主要施策として位置付けられた自然系博物館整備については、依然として具体的な準備が始まらないでいます。

静岡県は他県にくらべ自然が豊かで、自然の恵みの上に県民の生活があります。しかし、その自然の実態である動植物の分布や生態系についての基礎研究や自然環境の現状把握が組織的に行われていません。現在、静岡県の自然についての基礎研究や普及教育活動の多くは、県内の研究会や同好会の方が中心となって個別に行われているにすぎません。そしてその構成員は高齢化して、後継者が十分に育っていません。そのため近い将来、静岡県では自然について基礎研究や普及教育活動をする人材は不足し、静岡県の豊かな自然環境を保全・管理、普及して、後世に伝えることができなくなると、私たちは危惧しています。

私たちは、県立自然史博物館を動植物や自然環境についての展示機能のみの施設ではなく、その対象となる静岡県の自然についての調査研究と保存すべき標本などの収集・保存、展示を行なうとともに、自然についての情報センターおよび人材センターとして教育や政策に対しても社会貢献をする機関と考えています。これらの機能を果たすための県立自然史博物館をできるだけ早期に静岡県が設置することを要望します。

静岡県立自然史博物館の設置にあたっては、まず静岡県の自然についての基礎研究と標本

収集を中心業務とする「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」を設け、その機能の一部として展示や教育を行い、そのセンターまたは準備室が中心となってすべての機能を一体化させた静岡県立自然史博物館の設立を行うべきであると考えています。

## 私たちの要望する県立自然史博物館

### 1. 静岡県の自然研究の現状と県立自然史博物館の必要性

静岡県は自然が豊かで、日本の自然を理解するうえでも基礎研究をしなくてはならない重要な地域であり、防災や自然環境の教育や施策に関してもその研究成果が活かされる地域と思われれます。しかし、静岡県の自然研究の現状は、大学やその他の研究機関での個別な研究はあるものの、総合的で組織的な調査研究が行われていないばかりか、そのような機関と人材がない現状にあります。その典型的な例として、県で昨年度作成されたレッドデータブックがあります。これに係わった研究者の多くは大学などの研究機関に所属していない県内の研究会や同好会の方で、その多くが高齢で、次の世代の後継者が育っていません。また、レッドデータブックの基礎資料や標本についても、組織的に保存されていないため、散逸または消失しています。

静岡県の自然に関する散逸の危惧のある標本資料については、自然学習・研究機能調査検討会の提案を受けて、平成 15 年度から静岡県で自然学習資料保存事業が開始され、今年度も新事業として継続されています。この事業により、個人所蔵標本の一部の保存が進められていますが、現在自然の中にある静岡県の動植物で保存すべき標本の多くは、調査し保存する目処も立っていません。

静岡県の自然研究や現状把握なくして、自然の変遷や自然環境の保全、さらに自然環境教育

はできないと考えます。しかし、現在、静岡県にはその自然の現状把握をする機関もなく、人材も少なく、近い将来には静岡県では自然について研究や教育する人材が不足する可能性があります。そのような人材や組織がないことは、静岡県の自然の豊かさを認識し、静岡県の豊かな自然そのものを後世に伝えることができないことを意味します。

博物館は展示機能のみの施設ではなく、その対象となる「もの」についての調査研究と収蔵保存、さらに展示を行い、その「もの」についての情報と人材により教育や政策に対して社会貢献をする機関と、私たちは考えています。その中でも、自然史博物館は、現在の自然がどのようなものかということと、その成り立ちを明らかにして、後世に残すべき自然環境を地域の人たちとともに考え、それを残し伝えていくという機能もっています。したがって、県立自然史博物館は、静岡県の自然環境についての組織的な調査研機関であるとともに、資料収蔵保存機関であり、自然についての情報提供機関、さらに自然環境についての教育機関という複合機能も持ちます。

平成 13 年度に県が設置した自然学習・研究機能調査検討会では、「自然系博物館に関する県民ニーズに関するアンケート」を実施しました。その調査結果では、回答者の 52.8%が自然に関する施設が不足していると回答し、新たな自然系博物館が整備された場合「行ってみたい」と答えた回答者が 72.6%に上りました。同時に行った費用便益分析では、「社会教育施設としての県立自然系博物館の検討を進めるに値する県民のニーズが存在している」ことが確認されました。

## 2.自然史博物館の基本理念と目的

### (1) 静岡県の自然の豊かさへの理解を深めるために

私たちの住む静岡県は、雄大な富士山や南アルプス、美しい駿河湾や浜名湖、水と緑の伊豆などの豊かで多様な自然環境に恵まれています。このような静岡県の自然の多様性はどのようにして成り立ち、そして現在どのように変わりつつあるのでしょうか？この問いかけに答える努力をつづけ互いに対話を持つことこそ、静岡県の自然の豊かさへの理解を深めることに他なりません。

静岡県は、地質構造においても、また生物地理においても、東日本と西日本の境界に位置し、自然環境やその成り立ちをまさに現地で学べる場所です。そして、静岡県の自然史は、広く一般に島弧の自然環境と生物相の成立過程やそれらとの共存のあり方を世界に示せる可能性もっています。県立自然史博物館では、このように他県にはない自然の財産について、標本・資料等を収集・保管、調査・研究し、広く県民や国内外からの来訪者に公開して普及・交流をはかり、静岡県の自然環境に対する理解と認識を深める活動を行います。

### (2) 静岡県の自然環境の保全と共生のために

静岡県は自然が豊かと言われるものの、最近では森林や里山の荒廃が叫ばれ、貴重な動植物の生息地も損なわれつつあります。県版のレッドデータブック（絶滅の危機される動植物に関する資料集）でも明らかになったように、ほとんどの分類群で絶滅の危機される状況が進行しています。貴重種だけが重要で守るべきものではなく、自然全体があつて貴重種も守られます。今こそ、私たち県民ひとり一人が自然と共生する暮らしのあり方を考え、自然環境の保全に取り組むことが求められています。そのためには、県内の自然環境の現状やその成り立ちについての理解を深め、また自然環境の保全に関する知識を高めることが重要です。県立自然史博物館では、自然環境に関するよく整理された情報を県民に分かりやすく発信し、自然環境の調査や保全の活動をしている機関や団体同士が交流する拠点、ネットワークの核としての機能を果たします。また、現在県下では NPO 等による環境保全活動やさまざまな環境教育が展開していますが、公の立場からこれらと協同・展開して自然保護の実践的側面に貢献します。

### (3) 散逸や消失してしまう標本等を次の世代へ伝えるために

静岡県には貴重な動植物標本や過去の歴史を語る岩石や化石などを個人的に収集保管している方がおられますが、これらの多くは現在散逸の恐れがあります。また、県内には絶滅の恐れのある動植物も多く、これらを記録し、標本としての保管することも自然環境を知る上で大切です。さらに、個人の努力では収集や維持が不可能な巨木や露頭などの大型標本や特徴的な自然環境そのものも重要です。

自然環境の中では、一度失われたものを取り

戻すことはできないために、散逸しそうな標本や絶滅しそうな動植物の標本については、できるだけ早く収集・保管する必要があります。また、静岡県に分布する動植物や岩石・化石のすべてについて、段階的に標本を収集して自然環境調査の基礎資料とする必要があります。県立自然史博物館では、このような自然を次の世代に継承する活動を行います。

#### (4) 県民の生涯学習活動を支援するために

県民への自然系博物館に対するアンケートでは、自然系博物館の役割について「児童生徒の環境教育や課外活動の場」と「自然について学ぶ県民の生涯教育の場」を強く期待していることが明らかになりました。静岡県の自然を未来に伝えていくためには、子どもたちが自然と接して学べる場や県民が自発的に参加できる生涯教育の場が必要です。県立自然史博物館では、これらの学習や教育の場を提供し、そのような活動に対して積極的に支援する必要があります。

また、県内の自然関係の研究者が高齢化する一方、若い研究者や自然を愛好する子どもたちも育ってきていません。このままでは、郷土の自然だけでなく、自然を愛し科学する心までも私たちは次の世代に伝えることができない可能性もあります。そうならないためにも県立自然史博物館では、県内の機関やグループとネットワークを組み、自然について学べる機会をできるだけ多くを提供していきます。また、インターネット等を活用して、自然に関する情報発信や普及活動を行います。

### 3. 自然史博物館の設立に向けて

目指すべき県立自然史博物館像とその整備計画について、以下のように提案いたします。

#### (1) 目指すべき自然系博物館像

私たちの住む静岡県は、雄大な富士山や南アルプス、美しい駿河湾や浜名湖、水と緑の伊豆などの豊かで多様な自然に恵まれています。目指すべき自然系博物館は、この多様で豊かな静岡県の自然を詳細な調査研究によってさらに理解し、自然環境の保全と共生のために県民や研究機関とネットワーク組み、標本や自然環境を次の世代へ伝え、県民の生涯学習活動を支援するための機関であり、その活動の拠点となる十分な施設を有します。

この目的を果たすために自然史博物館では、

県民に開かれた博物館として、参加、協働、交流、ユニバーサルデザイン等に配慮して、自然環境の調査・研究、標本資料等の収集・保管、教育・普及と活動支援、展示・情報発信という活動を行ないます。そのために以下の点に留意して施設および人材整備が必要です。

①収集・保管および調査・研究の機能については、博物館活動の基本とし、必要な人材とスペースを確保する。

②収集・保管および調査・研究に関する人材については、地学（気象・岩石・層序・古生物）動物（昆虫・魚類・両生爬虫類・哺乳類・鳥類）菌類・植物などの主要分類群のそれぞれと生態学や自然環境学などに関して、その研究資料を国際的な研究者ともやりとりできる専門の研究分野の専門スタッフ（学芸員）を配置する。

③県内外の自然研究や自然保護グループと交流や協働し、そのネットワークや研究支援のための人材やスペースを確保する。

④社会教育施設として、学校生徒・学生も含め多くの県民が利用しやすいものとし、教育・学習支援できる人材やスペースを確保し、教育プログラムや学習システムを整備する。

⑤博物館活動の場として、実際のフィールドや既存の自然体験施設等との連携を視野に入れ、既存施設や地域の自然（フィールド）も活動のエリアにしなから、博物館活動の全県的な展開を目指していく。

⑥インターネットやデジタル技術などのIT技術の積極的に活用して、展示や情報発信、コミュニケーションに利用するための人材やシステムを確保する。

#### (2) 「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」の設置

自然史博物館の整備設置には、標本収集や調査研究などに長期間を要することを考慮すれば、早期に「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」を設置し、県内の研究者の所有する標本資料を適切に保全し、同時に調査研究を展開し、本格的な博物館整備の準備を計ることが必要です。以下に、「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」の設置と機能等について提案します。

##### ①散逸する危険のある標本等の収集・整理

現在実施されている自然学習・研究資料保存事業にほぼ相当します。収蔵スペースを確保し、散逸する危険のある標本・資料等を率先して収

集・保管を進め、同時にそれらを整理してデータベース化を図ります。また、その他の標本資料等についても積極的に収集・整理を進め、博物館資料の充実に努めます。

## ②「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」の設置とスタッフの配置

「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」を設置し、収集・保管および調査研究に関する人材や将来の自然史博物館の準備運営に携わる中心的な専門スタッフを確保し配置します。これらのスタッフは、収集・保管および調査研究を行なうと同時に、県内外の研究機関や研究グループと連携・協力できる人的ネットワークや組織的交流を構築し、自然史博物館の準備計画策定へ参画します。

この専門スタッフ（学芸員）として、動物植物化石の主に3分野の専門スタッフ3～6名と博物館の情報処理関係に精通した専門スタッフ1～2名の、当初は少なくとも合計4～8名の専門スタッフが必要です。また各専門分野については非常勤職員も必要になります。専門スタッフについては、以下の能力・資質をもつことが望まれます。

- ・専門分野の標本について分類し記載する能力をもつ。
- ・標本の整理・保管について知識と技術をもつ。

- ・標本やそれら動植物の生態など自然学習について教育者としての資質をもつ。
- ・専門分野の研究や市民による自然調査の指導者としての能力と資質をもつ。
- ・博物館の情報処理および情報発信について知識と技術をもつ。

## ③調査研究・情報集積の推進と公開

「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」では、静岡県の自然環境に関する総合的な資料・情報収集を図り、また調査研究活動や研究交流を推進するとともに、その成果を公開し、自然史博物館設立のために活かす活動を行います。成果の公開については、インターネットはもちろん収蔵標本・資料等の特別展示会や多様な普及活動を実施し、自然史研究センターの成果を広く県民に還元します。

## ④自然史博物館設置の策定準備

静岡県の自然に関する標本・資料等の蓄積、総合的研究、連携交流体制の確立、県民意識の醸成等の成果を踏まえ、「自然史研究センター」または「自然史博物館設立準備室」が主体となって自然史博物館設置の実施計画（活動計画、施設建設計画、管理運営計画等）を策定します。

## 図書紹介

### 日曜の地学

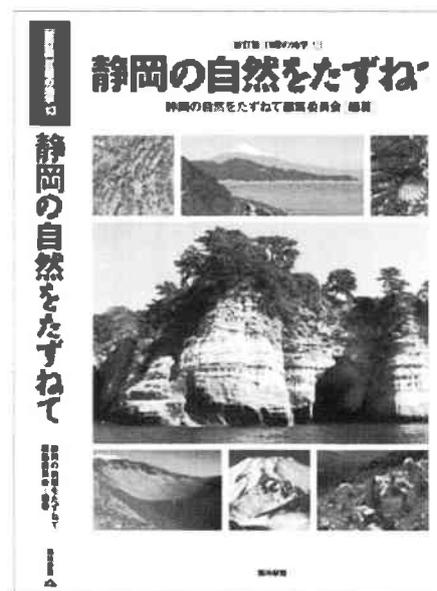
### 静岡の自然をたずねて新訂版

築地書館発行、定価 1800 円、A5 版 240 ページ

日曜の地学「静岡の自然をたずねて」は発行から14年が経過し、紹介した見学コースの露頭もなくなったところも多く、このほど新訂版が発行されました。静岡県の自然の概要は「静岡自然図鑑」がカバーしていることから、新訂版では静岡県内の自然（地質）観察コース（26）の案内を中心に、コラムを充実させました。ガイドに沿って、ハイキングまたはドライブしながら、静岡県のさまざまな自然や地形地質を見て歩くことができます。どうぞお手にとって静岡県の自然を歩いてみてください。

なお、お求めの方は1冊1500（著者割）+200（送料）=1700円でお分けすることができますので、以下の郵便振替にてお申し込みください。

郵便振替 00890-3-6568 柴 正博



（柴 正博）

静岡県の哺乳類 (4)

# モモンガ

三宅 隆



体に比べてクリクリとした大きな目、見れば見るほど可愛い動物で、哺乳類のフィールドをやっている者にしてみると、野外で一度は観察してみたい動物である。しかし、夜行性であり且つ県内では分布や生態もはっきりしておらず、「幻の動物」と言ってもいいくらいめったにお目にかかれない。静岡県のレッドデータブック調査中に、県内で確認された例数もわずか。私も本川根の寸又川左岸林道の奥で、夜間のコウモリ調査中にかすみ網に、誤ってかかってしまったモモンガを、一度見ただけであった。聞き込みなどによる県内の記録もわずかで、県版レッドデータブックでは情報不足というカテゴリーに入れた。どうしても野生のモモンガに会いたくて、昨年には、ついに八ヶ岳の山小屋にまで登山をして、苦勞しながら見に行ったことがあるくらいである。ところが、今年偶然にも、思いもかけず身近な所でモモンガに出会うことができた。

実は、数年前から静岡市の郊外、静岡駅から井川方面に車で1時間位の山の中に、自前で小さなツリーハウスを建て、自然学習、環境教育の基地(自分の逃避先?)を作ったのである。ヒノキ林の中なのだが、少しずつクヌギやコナラなどの落葉樹に変えていこうという計画で、定年後の生きがいの一つにしている。周辺には野生動物も多く、イノシシ、シカ、カモシカ、リス、ノウサギなどの痕跡もある。昨年末、その小屋の傍の木に、野鳥用に巣箱を架けた。時々シジュウカラが巣箱を覗いていたが、別に何が入っているか気にもしなかった。ところが、今年の5月末、巣箱の入口で何かが動く気配を感じ、双眼鏡で覗くと、大きなモモンガの丸い目が視野に飛び込んできたのである。それから観察が始まった。

6月7日 19:05分、まぎれもなくモモンガが巣箱から顔を出し12分には巣箱から出てヒノキの樹を上にスルスルと登っていった。その後、14分には2頭目が出、すぐに3頭目、4頭目が出てきた。なんとあの小さな巣箱に4頭も入っていたのである。どうりで、巣穴からいつも目だけ確認できた訳が理解できた。下の箱の部分に全部入りきらず、1頭は、入口の所にはみ出していたのだった。

6月11日 19:17分1頭目、18分2頭目が出る。その後モモンガは現れず、結局2頭だけになっていた。残りの2頭は子供で、子別れしたのだろうか?

6月19日 19:22分1頭目、25分2頭目が出る。2頭目は、樹を登り一番上の方から、皮膜を広げて滑空するのが観察できた。

6月28日 時間が経過しても1頭も出てこなかった。ヨタカの声だけが聞こえた。この日以来姿は見えなくなった。後日巣箱を開けて見ると、巣箱内一杯に、ヒノキの皮となぜか綿花が巣材として使われていた。

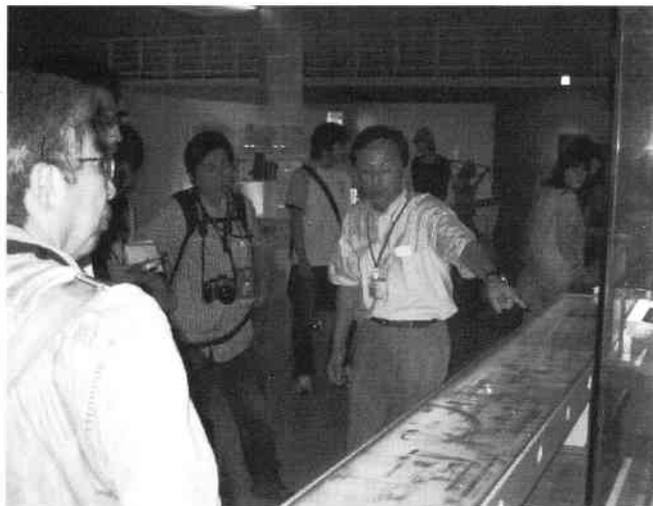
今回、偶然にもモモンガと出会え、楽しい時間を過ごすことが出来た。確認できないだけで、意外と身近に生息しているのかもしれない。来年もまた巣箱に入ってくれることを期待している。こうなると欲が出て、次は、すぐ横の溪流でカワネズミにも会ってみたいと思っている。

# 国立科学博物館新館の展示 と恐竜博 2005



# 国立科学博物館新館の見学と特別展恐竜博 2005 の見学

柴 正博



新館の展示について説明をする井上さん



PDA（携帯情報端末）

2005年6月12日（日）に、昨年11月にグランドオープンした東京の国立科学博物館新館と、特別展「恐竜博 2005」を見学した。参加者は15名と少なかったが、わきあいあいと館内をめぐる。特別展は人気が高く、見学した日が日曜日ということもあって、入場までに1時間ほど上野公園で列に並んだ。

特別展「恐竜博 2005」は、シカゴのフィールド博物館のティラノサウルス レックス（Sue）のレプリカとその特別展セットだけでなく、中国やモンゴル、北米などから産出された多くの恐竜化石が広く揃えられていて、また「恐竜から鳥への進化」というテーマで、展示が構成されていて、ストーリーとして理解しやすく、また関連する化石なども多くとても興味深かった。

午後からは、新館の見学となったが、新館の展示や設計思想についての概要や情報機器設備について、国立科学博物館情報サービス課課長の井上 透さんに時間をつくっていただき、紹介をしていただいた。また、展示解説用のPDA（携帯情報端末）も使用させていただいた。このPDAはそれ自体に数ヶ国語ですべての解説が内蔵されていて、展示解説については直接研究者がその場所で語りかけたものを録音したものだそうで、とてもわかりやすく編集され

ていた。PDAの展示解説システムについては、将来的には携帯電話などを利用するなどが考えられるが、現在の利用法としてはとても快適に利用できた。ただし、すべての解説を聞いていたり見たりすると4~5日かかってしまいそうで、じっくりと時間があって学習するときには重宝なものとなるだろう。

新館のグランドオープンは、すでに数年前に一部公開されていた新館展示フロアの奥に、各フロアごとその1.5倍ほどの展示スペースが付加される形で展開されていた。そのため今までの展示はイントロダクションといった感じで、その奥に各テーマで展示が展開されていた。

生物の多様性の展示では、床に系統樹が光の帯で連結し、壁にはそれぞれの系統の生物が展示されていた。天井にはりっぱマッコウクジラの骨格があった。これは数年前に浜岡に打ち上げられた個体で、静岡県で確保できなかったことを残念に思いながら眺めた。

哺乳類の剥製標本の展示は壮観で、とても広い展示スペースに、優々として今でも動き出すような姿勢で展示されていた。この多数のりっぱな剥製がすべて寄贈された標本と聞き、それにも驚かされた。

なにはともあれ、何度か行ってじっくりと味わいたい博物館に仕上がっていた。

## 静岡県の化石 (2) 掛川のサメの歯化石

横山 謙二



ベンケイガイにホホジロザメの歯がついて産した化石

静岡県掛川市中心に広がる掛川層群大日層には、多くの海生生物の化石が産出します。その中の一つにサメの歯化石があります。

サメは、軟骨魚類のため骨は化石になりにくいのですが、かわりに硬い組織のエナメル質（エナメロイド）象牙質で構成されている歯が化石として産出します。掛川層群大日層から産出するサメの歯化石は 20 種程産出しています。そのサメの歯化石の大きさや形は、種類や歯が生えている位置によって、さまざまです。ここで、掛川を代表するサメの歯化石を紹介しましょう。

掛川層群産の最大級の歯は、人食いザメとして知られるホホジロザメの歯化石です。ホホジロザメの歯は、細長い二等辺三角形型で、両切縁に鋸状のギザギザ、鋸歯を持つのが特徴です。前歯の大きい歯になりますと 8cm 程にもなります。最小の歯は、ツノザメの歯です。ツノザメの歯は、ほんの 2mm 程の大きさしかありませんので、目の細かいふるいで丹念に探さないとなかなか見つけられません。形の変った歯には、ネコザメの歯があります。見てのとおり、前歯は尖がった歯をしています。奥歯（側歯）は半円状の咬合面をしています。この側歯で硬

い貝殻を噛みつぶします。

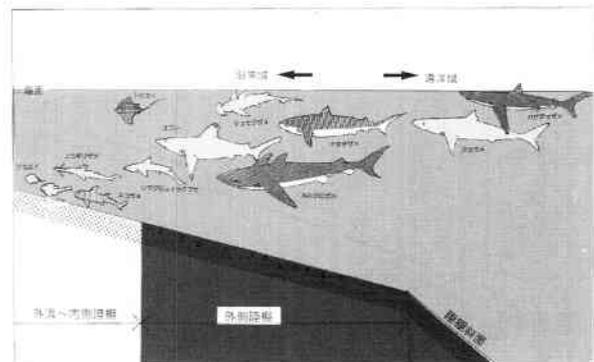
これら掛川層群大日層から産出するサメの歯化石は、現在も生きているものがほとんどです。産出化石種の現在の生息環境を調べてみると、亜熱帯地域の陸棚地域に生息している種が多いことがわかります。



ツノザメの歯化石



ネコザメの歯化石



いろいろなサメの生息域

# 三二博物館 2005 開催の報告

横山謙二・延原尊美



哺乳類やトンボの標本と化石の展示



化石クリーニング体験コーナー



レッドデータのパネルと標本展示



アユカケやヤリタナゴの水槽展示

平成 17 年 8 月 20 日から 8 月 26 日にかけての 7 日間、静岡市清水区辻の健康福祉センター庵原分庁舎にて「三二博物館 静岡の自然」を開催しました。展示内容は、レッドデータブックの動植物や化石・岩石を中心に、パネル展示や標本、実物標本の展示を行いました。また、化石発掘コーナーや立体模型作りなど子供たちが、体験し学べるようなものを用意しました。

まず、大地のおいたちコーナーでは、河原の石、掛川の地質と化石、フィギュアでわかる脊椎動物の進化、ナウマンゾウの発掘、富士山の熔岩などを展示しました。中でも好評だったのは、フィギュアでわかる脊椎動物の進化でした。また、静岡県でナウマンゾウの化石が産出していることに驚く人たちが多くいました。

レッドデータブックのコーナーでは、パネル展示を中心に、昆虫やねずみ、モグラの標本展示、レッドデータ種の植物標本 14 種や生きている魚類やカタツムリなどの展示をしました。中でも、アユカケやヤリタナゴなどの生きている魚の展示には、子供たちが興味深く観察しているのが見られました。また、静岡県の絶滅しそうなお魚や植物の展示も関心をもって見学される方が多くいました。

体験コーナーでは、化石発掘コーナーが好評でした。また、プラスチックのお弁当箱のふたを利用した富士山の立体模型作りでは、手軽で簡単に作成できる立体模型を夏休みの宿題として利用する子供たちが多くいました。

また、三二博開催期間中の 8 月 20 日には「袋



袋井市大日の崩れた崖で化石採集



掛川市板沢で土層の生痕化石を見学

井一掛川化石採集会」を、22日には「興津川の自然観察会」を行いました。

8月20日(土)の袋井一掛川化石採集会は50名を超える応募があり、バス定員の都合から40名にて締め切らせて頂きました。参加者は39名で、内訳は一般参加者数大人15名、中学生1名、小学生15名、未就学児2名、引率が袋井市教育委員会1名、延原、静岡大学生3名、東海大学学生と院生2名でした。

今回は単に化石を採集するだけでなく、化石採集の際に気をつけていただきたいことをイラストにしたクイズや、「生痕化石発見コンテスト」を行い、入賞者5名に化石標本を賞として出しました。親子参加のみなさまを中心に大いに盛り上がり、化石採集の心構えや地層観察そのものについても深く理解と興味をもっていただけだと思います。袋井市教育委員会のみなさまには、バスの手配・運行や企画運営に関して多くのご協力をいただきました。ここに感謝いたします。

22日の興津川の自然観察会は、月曜日ということもあり、参加者が2家族6名と少なかつたですが、講師陣は野鳥が三宅さん、蝶が清さん、植物が湯浅さん、淡水生物が大貴さんととても充実していました。観察会は、黒川のやすらぎの森で行い、ビオトープも利用しました。魚はもちろん昆虫や、蛇やカエルなども出現し、楽しい一日でした。

今回のミニ博物館は、保存事業室の開所が遅れ、事前の広報活動が十分にできなかったことなどから、開催期間中の来館者は130名ほどと昨年三島での同様の企画よりも少ない結果になりました。しかし、夏休みの宿題や自由研究のため、何度も足を運んでくれた小学生や化石



やすらぎの森での観察会

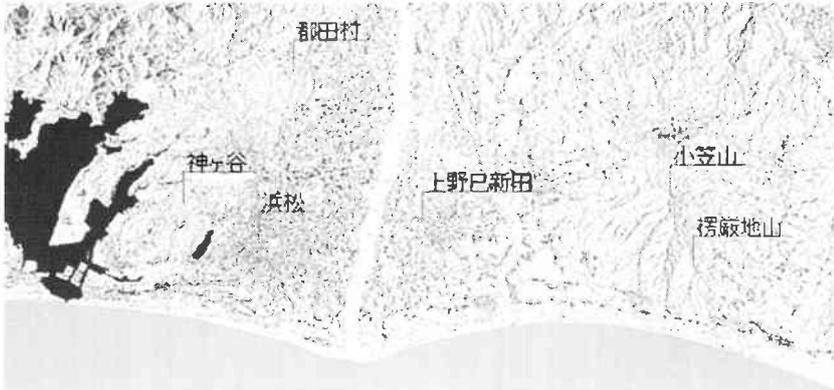
発掘体験コーナーを熱心にとりくみ子供たちがいました。また、展示物を一部かりたいという公民館の方々や近くで化石採集や地層の見学会を催してもらいたいという教師や静岡市教育委員会の方などもきてくださいました。それと、県の企画部の方も来館され、資料保存も含め熱心に見学して行かれました。

ミニ博物館の開催前と開催中に、このミニ博物館は静岡新聞に取り上げられたり、22日にはSBSのニュースで取材放映されたり、26日にはFM清水でインタビューがありました。このように、ミニ博物館に対するマスコミの関心は高く、事前の広報が十分であれば多くの方に来ていただける可能性もあると思います。また、来館された方からは、このミニ博物館の展示や企画を学校や公民館などへの移動博物館として利用したいという要望もありました。

以上のような今回の経験を、次回のミニ博物館に生かし、より多くの方々に我々の活動を理解していただき、自然史博物館の必要性をうたえていきたいと思っています。

## 三方原台地と磐田原台地の一等三角点

興石 邦昭



静岡県西部の大河、天竜川の右岸には三方原台地が、左岸には磐田原台地が広がっている。これらの台地は更新世の終りごろ古天竜川の氾濫原であった。三方原台地には「都田村」(みやこだむら、85.9m)と「神ヶ谷」(かみがや、37.2m)、磐田原台地には「上野巳新田」(うわのみしんでん、33.4m)の一等三角点がある(図)。都田村(北端点)と神ヶ谷(南端点)は、三方原基線となっている。既知の2点を結ぶ一辺とその両角から他点を確定することを三角測量と云い、この既知の一辺を基線と呼んでいる。地形図の作成にあたって、三角測量による累積誤差を少なくするために、基線は国内に約200kmの間隔で14ヶ所設けられている。最初の基線観測は明治15年に相模野基線(神奈川県)で行われ、三方原基線は明治16年に観測された2番目の基線である。基線は伸縮の少ない基準尺(長さ数メートルの物差し)などを用いて直接測定されるが、三方原基線は数十回繰り返し測定された結果、10839.9757mとされた。他の基線長が2.5~6kmであるのに対して、三方原基線は長いので、当時の観測の苦勞が偲ばれる。

「都田村」の標石は、浜松環状線(県道65号線)の赤松坂交差点から都田テクノ方面に向かい、赤松林と三方原用排水路沿いに約3.3km直進し、前原南交差点を右折、更に1.3kmほど直進すると左手に都田浄水場があり、ここに隣接する静岡県柑橘試験場落葉果樹分場との境界のイヌマキの生垣沿いにつけられた作業道

路際の1mほどの盛土上に埋設されている。この付近の土壌が赤~黄褐色化しているのは三方原礫層上部の風化赤土である。全国からこの一等三角点を見学に多くの人々が来場するとのことである。果樹圃場ではナシ、カキ、モモ、キウイフルーツなどの優れた品種が栽培されており、技術開発などの情報提供を行っている

るので、是非見学することを勧める。

「神ヶ谷」の標石は、先の赤松坂交差点を右折し、東名浜松西ICから約1.5kmの伊左地町交差点を左折、県道48号線(館山寺鹿谷線)を1.6kmほど進んだ西山町交差点を右折、800mほど直進した右側のコンビニエンスストアの駐車場の一角に埋設されている。ここの標石は鉄柵で囲まれているので触れることはできない。原野に佇む標石を思い描きたいが、時の流れを感じる一瞬である。帰路は、蜷塚の縄文遺跡や浜松の博物館に立ち寄るのもよいだろう。

「上野巳新田」はJR東海道線磐田駅の北西約2km、国道1号線沿いの京見塚公園にある。この公園には弥生時代中期~古墳時代後期の墳墓が復元されており、三角点の標石は古墳時代中期の円墳(径約50m)の頂上に埋設されている。京見塚公園へは、磐田警察署西交差点から三つ目の角を左折して、さらに右折すれば公園駐車場にでる。磐田原台地は南に約1.1%の傾斜を持ち、大小の谷によって南北方向に侵食されている。国道1号線は磐田原を東西に横断しているので、道路の上り下りで台地の開析状況が実感できる。円墳頂上からは天竜川の沖積平野を遠望でき、沖積平野に立てば、天竜川の側方侵食による急崖が見られる。国道1号線の沿いの北側には、ベッコウトンボの生育として知られる桶ヶ谷沼があるので、ここで自然観察を楽しむのもよいだろう。